

シノドスへの歩み

第二回 シノドスって何でしょう

こんにちは、東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日はシノドスとは一体全体何だろうということでお話ししたいと思います。わたしの体験を交えてお話しします。

・ 世界代表司教会議（シノドス）

世界代表司教会議（シノドス）は、第二バチカン公会議後の 1967 年から始まりました。通常総会はおおむね 4 年ごとの開催となり、それ以外に臨時総会、特別会議も行われます。教会が直面している課題について世界中の司教の代表が集まって討議をし、教皇へ意見を具申する役目を世界代表司教会議（シノドス）は担っています。教皇は司教たちの意見を聞いた上で、シノドス後の使徒的勧告として意見を発表するのが通例となっています。半世紀以上におよぶ歩みは、教会に大きな影響を与えてきました。しかし、一般の信徒の関心は決して高いものであったとは言えないでしょう。

・ 印象に残るシノドス

わたしは、1994 年に開催された第九回通常総会を印象深く覚えています。そのおよそ十年前に臨時総会（1985 年）を催して第二バチカン公会議についての再確認がなされましたが、それを受けて、第七回通常総会（1987 年）では信徒の召命と使命が討議されました。続く、第八回総会（1990 年）では司祭の養成について深められました。四年後の第九回通常総会は奉獻生活者に関するものでした。これは、新しい世紀の始まりを見据えて教会を構成する様々な人々に側面に光を当てるという一連の流れに沿ったものだったと思います。事実、新世紀を迎えての最初の通常総会は司教に関するものでした（第十回通常総会、2001 年）。このように世界代表司教会議（シノドス）は、時代の流れの中にあり続ける教会が直面する課題について取り扱い、教会のあり方を問いかけるものなのです。

ところで、奉獻生活について討議された第九回通常総会では、興味深いことが生じました。二週間におよぶ会期の前半で、参加した司教たちの意見が二つに割れたのです。それは、奉獻生活者の独自性をめぐってのことでした。詳細は省きますが、二つに分かれた意見のどちらにも理があるものです。つまり、簡単には白黒つけられないものでした。そこで、司教たちは当時の教皇ヨハネ・パウロ二世に判断を委ねました。そして、教皇様は会期中の水曜日に行われる通例の一般謁見の中で、問題の解決のための意見を述べました。そして、この意見は、通常総会後に発表されたシノドス後の使徒的勧告『奉獻生活』に反映されていきました。この出来事のおかげで、わたしは教皇が教会に果たす

役割のようなものを知りました。

・佐藤敬一司教さまの発言

さて、第九回通常総会に日本の司教団を代表して参加なさったのは当時の新潟教区の教区長であった佐藤敬一司教様でした。後で、司教様を神学校にお招きして、会議の様子などを伺う機会に恵まれました。「話が難しくてよく分からなかった」と謙遜に語っておられた司教様でしたが、どうしても一点だけ賛同できない意見があったそうです。そこで、「今までの議論を聞いていると、皆さんのお考えになっている修道生活は、何かサクセスオリエンテリングのように聞こえてきます。うまくいくこと、成功すること、上手にいくことを願っておられる。しかし、修道生活の中でうまくいかないときにこそ、成功できないときにこそ、神は恵みをくださるのではないのでしょうか？そのように考えます」と発言なさったそうです。若くて生意気な神学生だったわたしは、よく分からなかったおっしゃりながらも少し自慢げにお話になる司教様を見ながら、「ほんとかな？」、「司教さんまたほら吹いてるんじゃないの？」といぶかしく思っておりました。しかし、前述のシノドス後の使徒的勧告『奉献生活』の後半に、佐藤司教様の発言に基づいていると思われる箇所を見つけて、司教様の慧眼に感心させられました。同時に、どんな司教たちの意見も反映されていく世界代表司教会議（シノドス）の民主的なあり方を知りました。

・シノドスの変化

新しい世紀となり、世界代表司教会議（シノドス）の運営方法、課題のとりあげ方が変わってきたように思います。まず、討議のための提題とその解説（リネアメンタ）は各国の司教協議会、各教区に行き渡っていきました。おかげで様々な人々が、世界中で提題に取り組んでいく機会に恵まれました。もちろん、自分たちの現実とはやや離れた提題が示されることもありました。また、提題と解説に内包されている現代世界の現実気づかずに、的外れな回答を提出することもあったと思います。第十二回通常総会（2008）は神のみ言葉に関するものでしたが、日本の司教団の回答の中にはあまり適切なものだったとは思えないものがありました。しかし、続く、第十三回通常総会（2012）では、提題とその解説（リネアメンタ）を読むことを通じて新しい福音宣教についての学びを多くの司祭たちが深めることができました。司教団の回答もよかったと思います。このように少しずつ参加者のすそ野が広がっていったのです。その一方で、シノドス後の使徒的勧告などを読んでみますと、すでに前から教皇は伝えたいことがあって、それを通常総会を通じて明らかにしたのではと思えることもしばしばありました。神のみ言葉についての討議から生まれて世界中へと広まっていった「レクチオ・ディビナ」、また、すでに洗礼を受けた信徒を対象にした「新しい福音宣教」などは、当時の教皇ベネディク

ト十六世のところに前からあったもののように思えてなりません。かつてのような世界中の司教たちによる生き生きとした討議の場としての世界代表司教会議（シノドス）は少し形を変えていったようです。

・2015年のシノドス

2014年に召集された臨時総会は家族に関するものでした。そして、翌年の通常総会も「教会と現代世界における家庭の召命と使命」のテーマのもと家族に関するものでした。詳しいことは検証が必要で、憶測で発言してはならないでしょうが、どちらの世界代表司教会議（シノドス）もあまり成果が見られなかったように思います。参加した司教たちの一致が見られなかったのではと考えます。世俗化の進む西側先進国の司教たちと人口問題に直面する開発途上国の司教たちでは、家族や家庭についての理解にあまりにも隔たりがあったのだと思います。さらに、適宜開催される世界代表司教会議特別会議では、教皇の意向がうまく伝わらずに、教皇の発言と行為がパフォーマンスのように取り上げられ、批判されました。2019年の汎アマゾン地域に関する特別会議などは討議されている問題の重要性が教会全体に受け止められなかったと思います。その一方で、評価すべき点もあるでしょう。かつては教皇が裁定者のような役割を果たしながら、参加した司教たちが自由に意見を交換した会議のあり方から、最近では、多くのゲストスピーカーを招き、教会内外の意見に耳を傾けるようになりました。教皇もローマの司教として、自分の意見を発言し、討議に参加しています。

・シノド斯的教会へ

対話を重ね、より積極的に参加し、そして、ともに歩んでいく。そのような方向へと世界代表司教会議（シノドス）は変わりつつあります。こうして、第二バチカン公会議から半世紀を経て、「神の民」の素晴らしさを再確認するよい機会となっています。世界代表司教会議（シノドス）を活用しながら、教会のさらなる改革の歩みが始まっているように思います。こうして教会がすでに備えている「シノドス性」の再発見つつあるのです。次回は、一体全体、教会とは何だろうについてお話ししましょう。